



〈2020 R02142023〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
 - 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 - 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 - 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。
- | | | | |
|---------|------|------|------|
| マークする時 | ● 良い | ○ 悪い | ○ 悪い |
| マークを消す時 | ○ 良い | ○ 悪い | ○ 悪い |
- 5 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の A・B の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

故郷といっても別に決まった概念があるわけではない。離郷した人間がそれぞれの境遇からさまざまな故郷のイメージをつくり出す。ひたすら懐しい故郷もあったであろうし、悲しく思わなければならぬ故郷もあった。いつでも喜んで迎えてくれる人たちのいる故郷もあったろうし、帰りたいくても帰ることのできない故郷もあった。しかし、いずれにせよそれぞれの有するイメージが増幅されるなかで、あたかも万人に共通するような故郷ができあがる。a それは幻想であったかも知れないが、そのような幻想を生み出していったものとして、いわゆる小学唱歌の故郷を唄った歌を挙げることができるのではなからうか。義務教育の課程で、児童たちは故郷の地で、将来、離郷するしないにかかわらず、故郷の歌を唄い、歌詞を記憶することになるのである。

近代を迎え、農村から都市への人口流出が盛んになるが、その流れは二〇世紀を迎える前後において急になる。小学唱歌として故郷の歌がとりあげられるようになるのは、そのような時代的背景があつてのことであり、その歌詞にみられる情景に共感を抱く人たちが増えてくるのである。

一八八八年刊行の『明治唱歌(一)』に載った大和田建樹作詞の「故郷の空」は、その最も早いもの一つであろう。そこでは、「故郷の空」「故郷の野辺」「わが父母」「わが兄弟」がスコットランド民謡「Comin' Through the Rye」の曲を編曲したものにちがひなく唄われるのである。そして、一九〇七年刊行の『中学教育唱歌集』には大童球溪の「旅愁」と「故郷の廃家」が載る。前者ではオードウェイ作曲の「Dreaming of Home and Mother」の曲にあわせて「恋しやふるさと、なつかし父母、夢路にたどるは、故郷の家路」と唄われ、後者ではヘイス作曲の「My dear old Sunny Home」の曲にあわせて離郷後久しいのちに訪れた故郷で、「あれたる我家」をみ、「さびしき故郷」を実感することが唄われている。また、一九一三年刊行の『新作唱歌(五)』に載った吉丸一昌の「故郷を離るる歌」では、ドイツ民謡の曲にあわせて、「さらば故郷、さらば故郷、故郷さらば」と離郷が唄いあげられる。そして、この離郷の歌を承けるような形で、一九一四年刊行の『尋常小学唱歌(六)』所載の高野辰之作詞・岡野貞一作曲の「故郷」では、「故郷」の山川を唄い、「父母」や「友がき」の健康を気遣ったあと、「こころざしをはたして、いつの日にか帰らん」と帰郷を誓うことになっている。

これらの小学校唱歌に描かれている故郷は農村である。あるいは田舎といってもよいが、そこにはもちろん山村も漁村も含まれる。そして、離郷する先は具体的に歌詞には現われないが、都市・都会である。b 都市が故郷で、農村が異郷である人もいるし、都市から都市へ、農村から農村への移動もあるわけであるが、それではさまにならないようである。また、事実としても農村から都市への人口流出が最も多かったのである。柳田国男は、「日本の都市が、もと農民の従兄弟に由つて、作られた」として、日本では近代以前から都市はつねに農村から出てきた人によって形成されてきたことを強調し、それが近代以降になってさらに強まってきたことを明らかにする。

農村から都市への人口流出という形で離郷を促進したものに鉄道の開通がある。新渡戸稲造は、その結果として生ずる「人口の都会に漸殖して田舎に漸減する事実の影響は単に農業にのみ止まらず、全国の経済的生活にも種々の関係を醸成す」といつている。そして、横井時敬は農村から都市への人口流出を「都会熱」と名づけ、「あたかも一種の伝染の病」とみなし、農村を滅亡させる原因になると警鐘を鳴らし、健康・健全な田舎から不健康・不健全な都会に出ることを堕落とときめつける。これに対して、柳田は「元来人口の都会集中、即ち今時田舎の若者が都会へ出たがる傾きは、人類発展の理法」であり、「心理上経済上極めて自然なる趨勢である」といつて横井の主張を批判し、「かくの如き人口の移動」は「田舎に余つて居る労力を都会に供給し、都会に余つて居る資本を田舎に持つて行く」といつ「経済政策の極意」を「不十分ながら天然に為し遂げる」ものであると評価するが、そこには柳田が都会に出てきた「田舎の若者」の多くは「或年まで働いて」「相応に金が溜ればすなわち田舎に帰る」と考えていたことを反映している。c 小学唱歌「故郷」の「こころざしをはたして、いつの日にか帰らん」といつのがこれにあてはまるものであろうか、果たして実態はどうであつたらうか。

離郷にはみずからの意志で行なわれるものと不意ながら行なわれるものとがあつた。そして、その間には明らかに階層性というものがある。青雲の志を抱いて都会に出るとか、笈を負うて遊学の途に就くことばがあるが、これは経済的にある程度恵まれた中農以上の子弟にとつて可能であつたものである。d そして、彼らのなかには、そのまま都会に留まり、近代日本の各界における指導的人士になつたものも少なくない。文字どおりの出世であるが、各界の指導的人士にはこうした地方からの出身者が多いのは事実である。故郷に x を飾る存在というのがこれである。もちろん、貧農の出身でもこうしたことがまづたく不可能であつたわけではないが、その場合は苦学を必要としたであろう。立志伝中の人物といわれるものなかには、そのような経歴の人がみられるが、そういわれるだけに決して数は多くなかつたのである。これらの人々はいずれにせよ郷土出身の名士として讃えられ、生涯を通じて故郷に好ましい印象を持ち続けるのが大部分であつた。また、故郷の側でも何かの折に寄付などを要請することもあり、それに快く応ずることによつて名士としての名をいつそう高めることにもなつた。さらに、郷党の先輩として、新たに離郷してきた後輩の面倒をみることもあつた。そうしたことを組織的に進める団体として「同郷会」や「郷友会」といつたも

のが結成されるとき、中心となるのはこのような人々であった。

ところで、都会に遊学した人々のうちには学業を終えると、故郷に帰り、そこで指導的役割を果たすことになるものもいた。村長や村農会長などにはそのような経歴のものが多くみられる。世間をみてきたということで、彼らに、村の新知識として、そうした社会的地位が与えられるのである。柳田が田舎の若者が都会に出ることそれ自体を心配する必要がないとしたのは、このような故郷回帰が予定されたからである。そのさい、柳田が若者の離郷自体に心配はいらないとしながら、離郷が「家道の零落」や「祭祀の滅絶」につながることは避けなければならないと考えていたことに注目する必要がある。なぜなら、そこには離郷の階層性の反映がみられるからである。

「祖先」が「繁栄せしめんと欲した意思」を代々の「子孫が行ふ」機構であり、「各人」が「其祖先」と「連絡」を持つというところで「家の存在」を「自覚」することが「個人と国家との連鎖」としての役割を果たすものとみなし、そのような社会的意味を有する「イエ」を代々の「子孫」である個人が「つぶす」ことを、「ドミシード即ち家殺し」と呼び、それは「假令現在の家族に一人の反対が無くとも」許されるものではないと考えていた。柳田は、この「ドミシード」には、直接「イエ」をつぶさずとも「祖先」の「意思」を忘却することも含まれるとして、「都会」に移ってしまつた人間には「祖先子孫といふ思想が微弱にな」り、「家の水統を軽んずるといふ」風潮が生ずることを憂うからこそ、「次男三男などの予備の人間」以外の離郷はあくまで一時的なもので、いずれは故郷に帰らなければならないと主張したのである。このような「イエ」が存在してはじめて故郷の維持も可能となると考える柳田は、中農養成の必要性を説き、「我」が「終には普通のものとなる」ことを理想とするのである。そして、そのためには、「耕地の面積が非常なる制限を被ぶれる我國の如きに在りて」は、「農戸の減少は必しも悲しむべきことに非ず」して、「悲しむべきは寧ろ其増加なり」と柳田は断言するのである。したがって、農戸の減少のためには、むしろ一定の階層以下の農民の離郷は歓迎されるべきことであつたのであるが、そこには「自給を以て生産の標準とする旧来の細農制を改めて、農を以て一の独立の生産職業と為し、分業の理法に従ひ専門的に其生産方法の発達を計らしむる」こと、すなわち日本農業を生業のレベルから職業あるいは企業に転換せしめ、農民を農業だけで食べる中農に養成することが肝要であるとする柳田の政策的主張がうかがえるのである。

(岩本由輝「故郷・離郷・異郷」による)

B

富貴にして故郷に帰らざるは、繡を着て夜行くが如し、誰か之を知る者ぞ。とは沐猴冠者の語なれども、実に不朽の真理を蘊みたるものといふべし。業成り名遂げたる者、誰か故郷に帰るを欲せざる者あらんや。見よ笈を負ふて東都に出て、一片の卒業証書を懐にすれば、忽ち帰心矢の如く、之を故郷の父老親近に示さんと欲するにあらずや、彼らなんすれぞ故郷に恋々たるや。チエルが主宰相となるや、帰りてその郷先生を訪ふ。先生曰く、君は何の職業をなせしや。チエル答て曰く、余はミニスターたり。先生色を變じて曰く、君はカトリック宗の信者にあらずや、豈に改宗して新教に入りたるか、なんぞミニスターとなりしか。曰く、余が所謂ミニスターは伝教師の謂にあらずして、宰相の謂なりと。先生笑て曰く、戯言するなかれ、君いづくんぞ宰相たるを得ん。曰く先生疑ふなかれ、もし余が言を信せずんば、先生望む所を陳べよ、余必ず先生の為めに之を遂げ得せんと。先生曰く、余や他に望む所なし、余の郷校をつかさどる十数年、しかして未だ教員恩給俸にあづかるを得ず、君もし宰相たらば、請ふ余が為にこれを弁せよと。幾もなくして郷先生恩給令下れり。韓信が楚王となるや、かつて己を辱めたる悪少年を封じて都尉となし、一飯の徳ある漂母に向て千金を施したり。蘇秦が累々たる六国の相印を帯ぶるや、まづその故郷に帰り、己れがために炊がざりし嫂、紉を下らざりし妻をして蛇行匍匐四拜、三十里外に郊迎せしめたり。漢高の天下を平定するや、豊沛の父老を訪へり。太閤の小田原陣よりかへるや、まづ銀杏村に入れり。華聖頓の退休するや、依然たるマオント・ウオーノンの一農夫と成れり。彼等が爛焉たる偉勲は、天下万人の仰ぐ所なり、なんぞそれ草沢山野二三の父老の憐を乞ふを要せんや。しかして彼等が天下に向て、不世出の勲業を建つるや、あたかも小学校生徒が進級証を懐にして、まづその父母に示すが如く、故郷の父老に示す所以のものは何ぞや。

独り是に止まらざるなり。彼等は得意の時のみ故郷を求めざるなり、失意の時にも求むるなり。見よ南洲はその死せんとする時に際しても、なほ「秋風埋骨故郷山」と言ひしにあらずや。彼等は故郷より好遇せらるるが為に故郷を愛するにあらず、虐待せらるるも尚故郷を愛するなり。孔子魯を去る、遅々として行きしにあらずや。基督の如きは、その郷人より彼は大工の子にあらずや、その母はマリアにあらずや、その兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや、その妹等は我が儕とともに在るにあらずや、彼如何なる奇才異能あるやと、彼を厭ひ彼を棄てたるにかかはらず、彼はしばしばその故郷なるベツレヘムに還へりしにあらずや。彼は曰く、預言者はその故郷に尊ばれずと。彼之を知る、然れどもなほその故郷に恋々たりしは何ぞや。

何をか故郷といふ。その出産したる地方なるか、その成長したる地方なるか。その故郷の区域は、面積幾万里なるか。その出産成長したる村落を以て故郷といふか、郡を以て故郷といふか、県を以て故郷といふか、もしくは更に大なる地方を以て故郷といふか。人の立つ所の位置によりて、見る所の眼孔によりて、故郷もまた一なる能はざる也。一村落よ

りすれば、その三五の近隣は故郷なり。一郡よりすれば、その一村落は故郷なり。一県よりすれば、その一郡は故郷なり。一地方よりすれば、その一県は故郷なり。一國よりすれば、その一地方は故郷なり。世界よりすれば、一國は故郷なり。宇宙よりすれば、すべて吾人々類の棲息する地球は故郷なり。然れどもこれ未だ以て故郷の真意を説明するに足らず。故郷は必ずしも Y の土地にあらず、ただその人の心に忘れんと欲して忘る、能はざる最初の感觸の剗刻せられたる所、これを故郷といふのみ。古人の詩に曰く、「客舍并州已十霜、掃心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望三并州是故郷」と、この時においては、并州却て故郷の感あるなり。然れども愛郷の念最も深きは、その感觸の最も深き所にあり、感觸の最も深きは、最も神聖なる連感の之に伴ふにあり。ただこれ一片の青山のみ、然れども吾人父祖の骨を埋めたる所と思へば、風に臨んで涙流る、なり。ただこれ茫茫たる原野のみ、然れども吾人の先祖が忠義の為に、千兵万馬の間を驟馳し、その碧血を野草に染めなしたりと思へば、懐旧の感勃々として来るなり。ただこれ一株の栗樹のみ、然れども吾人が少年の時に、兄弟姉妹とその下に戯れ遊びたるを思へば、あたかも昔日の吾、昔日の兄弟姉妹、昔日の我家の境遇、恍然として眼中に入るなり。人の故郷を愛するは、必ずしも山水の絶佳なるがためにあらず、風土の秀麗なるがためにあらず、氣候の温和なるがためにあらず。故郷は一種のインスピレーションなり。思ふて故郷に到れば、無言の青山は、なほこれ千万丈の記念碑の如く、茫茫たる原野も、なほこれ旧時の血歴史かと思はる。一木一草の微といへども、なほ千糸万縷の情こまやかにして、傍人の得て知る所にあらず。それかくの如き所以のものは何ぞや。人は過去、現在、未来の三世に住す。三世中最も短きは現在なり。最も明白なるは過去なり、最も測り知る可からざるは未来なり。吾は一なれども、時によりて異なるなり。過去の吾は現在の吾にあらず、現在の吾は未来の吾にあらず。何が故に現在に最も短しとするか。一秒時間前は過去なり、一秒時間後は未来なり、然らば現在の吾とは、ただ一秒時間の吾にあらずや。あたかも垣柵中を走る馬の如く、後蹄は既に過去の領分たらんとし、前蹄は將に未来の領分たらんとす。現今の吾は閃電ただならざる寸刻にあるのみ。故に人一生の間、その過半は過去と未来の為に支配せらる。しかしてかの故郷なる者は、過去の標幟にして、千回万転思ふて過去に到れば、遂に故郷に帰着せずば休せざるなり。身世遭遇幾多の快樂ありしか、幾多の苦痛ありしか、また幾百の戦争を経たりしや、すべてこれらの事を回想し来らば、帰着する所は故郷にあるなり。老杜のいわゆる「魂招不來歸故郷」とは、このことなり。

故郷はすなはち過去の記憶と Z とを以て、建立したる神聖なる殿堂なり。東流の水の海に注ぐが如く、人の想念はこの殿堂に向て注ぐなり。英国の詞宗バイロンの如き、郷国に容れられず、憤慨のあまり、郷国に向て最後の告別をなして曰く、余は巖根より漂ひたる葦の如く、波瀾の湧く所、風濤の呼吸する所、泛々として行く所に任すべしと。然れども彼また曰く、余は異郷の灰となるも、余の魂はなほ故郷を愛するなりと。遺山曰く、「眼中正有家山在、一片傷心画不成」と。彼故郷と交りを絶ちたるバイロンにしてかくの如し。彼亡国の遺臣たる元遺山にしてかくの如し。之を思へばかの大人君子、英雄豪傑が故郷に恋々たるも、また決して異とするに足らず。風雲の氣、兒女の情、豈に必ずしも相ひ衝突するものならんや。否、彼等は最も多血多涙の熱腸なるにあらずや。身を先帝に致し、五丈原頭師を出すの日も、なほ南陽の旧草廬を忘る、能はざるにあらずや。

(徳富蘇峰「故郷」(一八九〇年)による)

注 (1) チエル……フランスの初代大統領、アドルフ・テイエル(一七九七―一八七七)のこと。

(2) 韓信……紀元前の中国秦末の武將。(3) 蘇秦……紀元前の中国戦国時代の政治家。

(4) 紕……機織りの糸をさす。(5) 漢高……紀元前の中国漢の初代皇帝となった武將劉邦のこと。

(6) 豊沛……現在の中国江蘇省徐州市の沛県。(7) 南洲……西郷隆盛(一八二八―一八七七)。

(8) 剗刻……けずり、きざみつけること。

(9) 古人の詩……賈島の「桑乾を渡る」。詩句中の「并州」は、北京近郊の桑乾河の南にある土地。

(10) 驟馳……駆け回ること。(11) 老杜……中国唐代の詩人杜甫の尊称。

(12) バイロン……イギリスの詩人(一七八八―一八二四)。

(13) 遺山……中国金末期の詩人元好問(一一九〇―一二五七)。

(14) 五丈原頭師を出すの日も……蜀の諸葛孔明の逸話をさす。

問一 A の文章の空欄 X に入る漢字一字を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二 次の文は、A の本文中に入るべきものである。空欄 a e の中から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

つまり、農村が故郷で、都市は異郷ということが前提になっている。

問三 Aの文章中にある柳田国男の故郷に対する考えを説明した文として適切なものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 家殺しを意味する「ドミシード」は、祖先の意思をないがしろにするなどの間接的なものを含む。
- ロ 日本では、近代になると農村出身者が都市部へ移住するようになり、その人々によって都市が形成されてきた。
- ハ イエは、個人が祖先とのつながりを保つことで受け継がれていく機構であり、故郷のなかで守られていくものである。
- ニ 農村出身の長男が都市へ移住する場合は、一定期間を経て帰郷すべきではあるが、中農が養成されるのであればその限りではない。
- ホ 日本の農業は、単独で生計が立てられる職業として発展させるべきであり、そのためには農家の数が増えることは好ましくない。

問四

Aの文章の傍線部「それぞれの境遇からさまざまな故郷のイメージをつくり出す」とほぼ同様の内容を述べた一文を、Bの文章中から三十五字以上四十字以内で求め、その最初の五文字を抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ(句読点等が含まれる場合は、それらも一字とする)。

問五

Bの文章の空欄 Y Z に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ	Y	現実的	Z	幻想
ロ	Y	排他的	Z	美化
ハ	Y	客観的	Z	想像
ニ	Y	相対的	Z	憧憬
ホ	Y	空想的	Z	回想

問六

AおよびBの文章の趣旨と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ Aの文章では小学唱歌が故郷のイメージをつくり出すと指摘しているが、Bの文章では幼少時代の苦難が故郷のインスピレーションに作用すると述べている。
- ロ Aの文章では離郷にも階層による条件があったと述べているが、Bの文章では離郷を促すものもつばら万人に共通する青雲の志であると指摘している。
- ハ Aの文章では個人の意志によって行なわれる離郷を中心に論じているが、Bの文章では強いられて故郷を離れることになった場合の愛郷心についても検討している。
- ニ Aの文章では名士になった帰郷者の多くが故郷に好印象を持つと述べているが、Bの文章では迫害を受けた偉人たちの故郷への愛憎の思いが提示されている。
- ホ Aの文章では人口流出によって深刻な田舎の荒廃が生じたことを指摘しているが、Bの文章では故郷を風光明媚な理想郷として描いている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

二〇世紀後半の芸術界は、第二次世界大戦が終結した後、多様なモダニズムによる新しい流派が次々と誕生し、またそれらが重複し合って、極めて活性化した状況を呈していた。

それは、ナチズムやファシズムなど、平常ではとても考えられないような、世界の多くの国を巻き込んだ苛酷な戦争を起したことから深い反省と共に、強い平和への希求、そして文化や文明や芸術への渴望がもたらした精神性に支えられていたと言えるだろう。しかし、その創作性に溢れていた時代感覚は、二〇世紀の終りへと向かう時間の推移と共に次第に衰退し、核となる中心的思考が失われた今、私たちはポスト・モダンと呼ばれる弛カ¹ンした状況の渦中に置かれている。

私が行っている音楽は、言うまでもなく、言葉中心の芸術ではない。あくまでも、音が主役である。これまで言葉は、歌詞として用いたことは再々あったが、それは音楽の考え方や構造にまでかかわって影響を及ぼす素材とは異なっていた。芭蕉によって完成された俳諧は、もちろん今は古典として存在している。だが、その普遍的とも言える内容は、言葉の領域にとどまらず、時代さえも超越して、他の分野に対しても大きな影響を与えうる可能性をもっていることを、私は連詩を通して知ることになった。連詩は詩人の大岡信さんが、連句や連歌をベースにししながら、現代の俳諧として蘇らせた分野である。そして彼は、この日本の古典に立脚した独特の詩を、しばしば国際的な場に於いて、何ヶ国もの外国人を引き込んで、国際語の詩として世に問うてきた。

よく音楽は、基本的には言葉を用いない芸術であるので、世界中のあらゆる人と、言葉の障害を抜きに、容易にコミユニケートできる分野として語られる。また音楽は、その内容自体に、音の有機的關係から育まれるドラマ性を有している故に、特にヨーロッパでは時間芸術として定義されてきた。だが連詩も、そしてもちろん連句や連歌も、イメージや、言葉のつながりや流れを大切にすることから、時間と同時に、いやむしろそれ以上に、空間的イメージが十分に考慮され、活かされなければならないことは言うまでもない。その点で、音楽の時間のみならず、空間性に対しても、新しい問題を提起してくれる要素が秘められていると言つてよいだろう。

では、その根底を司っている価値観とは何なのか、ということであるが、それは俳諧が何よりも複数の人々によって営まれ、創られる詩であることに尽きると言えるだろう。通常、俳句にせよ、和歌にせよ、或いは西欧や近代の詩に於いても、作者は全て一人である。私が音楽との関連で、連詩や連歌の世界に惹かれた理由は、それが西欧の文明社会に於ける自己主張や、自己表現とは異なる表現形態である点である。それはたとえば、オリジナリティの問題ともかかわってくる。複数の作家による共同制作の場合、予測不可能な他者の介入に伴う未知の世界を許容しなければ成立しえない。そこでは当然のことながら、オリジナリティの概念は、近代西欧が培ってきた個人主義に根ざした自己表現とは違った内容になってくる。俳諧はまた、芸術と日常性という点でも、完結した作品を至上のものとしてきた西欧的な在り方とは異なる。

芭蕉や芭蕉の弟子たちによって書き残された紀行文などを讀むと、彼らは旅の先々や、訪問し合った先で、多くの歌仙を巻いていたことがわかる。何人か集まれば、すぐ歌仙を巻くという姿勢から考えられるのは、俳諧はその成り立ちからして、それは食事をしたり、お酒を飲んだり、旅をしたりすることに通じる日常的な要素をもっていたのではないかと、ということである。つまり今日的に言えば、芸術的行為の中に日常性をとり込んでいるその在り方には、芸術をそれ自体独立した特別なものとするのではなく、芸術と日常の間に存在する境界線の意識が稀薄であり、芸術と日常をつなげたり、相互に浸透し合ったりするものとして認識していたと理解できるのである。

もちろん俳諧には歌仙のつくり方や、進行のさせ方、或いは特定のテーマの設定など、厳しいルールや作法が存在する。また、高い境地の文学性や芸術性が要求されるわけであるが、それは西欧のようにそれ自体で完結した虚構の理想の世界を構築するのとはちがって、開かれた精神交流の場としての性格を有していたのではないだろうか。

私にとつて、特に興味をそそられたのは、私が一九五〇年代後半から六〇年代にかけて作曲する際採用していたグラフィック・ノートシヨ^Bン(凶形楽譜を用いた記譜法)による音楽の一回毎に異なる演出やパフォーマンスの予測を超えた I 性や II 性や III 性とも通じる要素を、そこに見出せる思いがしたことであった。

私は以前に、できれば音楽家同士、作曲家同士で、俳諧の連衆に相当するグループをつくつて、複数による共同制作の作曲が出来ないか、とひそかに仲間を探していたことがあった。だがこれは叶うことなく、実現を見ないまま時が過ぎていった。そこで私は一大決心をして、一人で複数の役割をしてその発想や考え方を生かす方法で作曲出来ないかと、折にふれ構想を練つていった。俳諧の形式や在り方をなぞる真似事ではなく、連歌の本質に触れられるような音楽のつくり方が出来れば、と思つているうちに構想はどんどん膨らんで、結局私が書いたオーケストラの曲では、それまででもっとも長大なものになってしまった。と言つても四五分から四八分くらいの長さであるが、この三分くらいの違いは、時間が厳しく決められていない、いわば非西欧的な時間感覚や音の扱いによるもので、指揮者や演奏家の「間」のとり方や、速度感の違いによって生じる差である。

音楽を司る要素としては、音の高低があり、音の長短があり、音の強弱があり、また音色などがある。また、音の時間的流れを構成する有機的な關係で言えば、メロディーがあり、ハーモニーがあり、そしてリズムがある。詩の言葉や、その言葉が写し出す情景やイメージから醸し出される雰囲気や音に移し変えるには、木管、金管、打、鍵盤、弦など多くの楽器の種類や性格や個性の違いが、言葉を反映する要素として不可欠であり、それにはオーケストラが、もっとも適していると考えた。前の人が詠んだ言葉を受け継ぎ、自分の言葉を介して次の人の言葉へと受け渡すという連歌の基本は、音色や種類の異なる楽器のさまざまな引き継ぎ方で、旋律や律動の流れを、同時に幾つかの音を発生させる和声的、集合音的な縦の音の構成では、楽器の種類や性格を変えて、強弱による響きの違いによって音の厚さや重量感を演出した。

(三) 次の甲・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲「次の文章は、『柳宗悦 民藝紀行』「蓑のこと」(一九三七年初出)の一節による。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

『和訓栞』に依れば蓑の語源は「身荷の義なるべし」とある。身に担うの意に基づいたのか。この外に異説の文献は見当たらず。蓑を「蓑」とも書くが正しくない。『和漢三才図会』は一説を立て、元來は「衰」という字であったのを後人が艸を加えて「蓑」となしたのだという。

昔から「みの」は「にの」とも発音された。出雲国飯石郡では今もこれが通音である。『天治字鑑』十二に「蓑 乃」。『万葉集』十二に「久方の雨のふる日を我が門に しの笠きずてきたる人や誰れ」とある。富山県では「みのこ」という言葉を用いる。これは女用の蓑でやや小型である。

蓑とは「雨衣」を意味すると『和名類聚抄』などに記してある。または「草雨衣」とか「御雨衣」なども昔から説いた。その作り方、材料などについては『三才図会』の述べる所が最も要を得ているから引用しよう。

按、蓑雨衣也。用茅打柔編為之。漁人行人以禦雨。或以藁為密薦上施首作之。農人為三雨衣。

蓑の元來の用途はこのように雨衣である。雨衣には昔は「雨衣」があり、「合羽」があつたが、起原はもとより草で編んだ蓑の方がずっと古い。雨の時には雪の時にも用い、また野に働く時、旅に出る時、誰も便利を感じた用具である。上公家より下農夫に至るまで、誰にも用いられた。

古書を繙けば蓑に関する文献は様々あるが、中で最も古いのは『日本書紀』と思える。「素戔嗚尊結東青草、以為笠蓑、而乞宿於衆神。衆神曰、汝是躬行濁惡、而見逐論者。如何乞宿於我、遂同距之」と同書一神代卷に記してある。だから草を結んで蓑を作つた歴史は甚だ古い。だが蓑は日本で生まれたものか、これも必定中国から教わつた技であつたと考えられる。今日台湾で使う蓑を見たが、日本のそれが由來した跡が想像出来る。中国の文献は『日本書紀』よりもっと古い。『列子』を開くと次の文字が出てくる。「吾君方將被蓑笠而立乎畎畝之中、唯事之恤」。これで見れば歴史は遠い。「蓑笠」という対句は、丁度「I」の如くほとんどつきものとして日本ではしばしば歌にさえよまれたが、この言葉も既に早く中国にあつたことが分かる。古詩に「何蓑何笠」などという句もある。「何」は荷うの意である。江為の詩に「何時洞庭上 春雨滿蓑衣」とあるから、中国では「蓑衣」なる言葉も用いた。

蓑が元來雨衣であることは今記した通りであるが、暑い地方ではこれを日除けにも用いた。薩摩地方の「ひみの」の如き例である。もとより「日蓑」の義であつて、夏の日除けである。

蓑に因んだ幾つかの言葉も此処に添えておこう。前に記した如く、よく用いられるのは「蓑笠」の言葉で、もとより蓑と笠と二つのものを示した言葉だが、いつも共に用いてつきものである。「蓑になり笠になり」などという諺もある。表になり裏になつて庇う意味である。「蓑笠はてんで持ち」の句は必要なものは各自で有てとの心。「蓑造る人は笠を着る」といえば互いに寄り合う暮らしのこと。「蓑笠を着て人の家に入らぬもの」と訓したのは、素戔嗚尊の故事により、**II** 意に用いる。この蓑笠は『万葉集』の古歌にも見えることは前に引いた歌の例でも分かる。

活物にこの字を冠せられたもので誰でも思い起こすのは「蓑虫」である。蓑を着た如き様からかく呼んだのはいうまでもない。この頃は利用の道も立ってその藪が役立つが、昔はいい例にはとられておらぬ。『枕草子』には「みのむしのやいとあはれなり」と記し、『宇津保物語』には「乱れ足は、動かれず侍り。左、右にかづき賜はる物は、みのむしのやうにてや、むくめき参らん」などと書いてある。次には「蓑龜」、これは蓑の如く若がはえた龜の義で、賀慶の徴になつて目出たい。続いては「蓑貝」「蓑螺」「蓑五位」などを挙げる事が出来る。いずれも形の連想からつけた名である。植物では「蓑草」の一字かと思う。『三才図会』に、「香茅、俗云、太末保、又云、蓑草、云云、農家用之作雨衣」と記してある。『赤染衛門集』に「三笠山麓の露の露けさに かり試みし野辺のみの草」とある。

次には「蓑毛」という言葉。これには三つの意味があるという。一つは蓑の乱れたる如き様。『太平記』には「雨の降るが如くに射ける矢、二人の者共が鎧に、蓑毛の如くにぞ立たりける」。一つは鷹の頸に垂れたる蓑の如き毛のこと。『拾玉集』に「すこきかな加茂の川原の河風に みのげ乱れて鷹立るめり」。為家の歌に「ある鷹のおのが蓑毛も片よりに 岸の柳を春風ぞふく」。また別の意味には筆の穂に用いる馬の毛を蓑毛とも呼ぶ。

またしばしば用いられたのは「蓑代」とか「蓑代衣」とかいう言葉であつて、「代」は代用の意であるから、蓑の代わりをして雨を凌ぐ雨衣のことである。『狭衣物語』に「みのしるもわれ脱ぎ着せん返しつと 思ひなわびそ天の羽衣」。『後撰和歌集』に「降る雪のみのしろ衣打着つつ 春來にけりと驚かれぬる」。

「隠蓑」なる言葉は『信綱記』にもいう如く、「鬼之持たる宝は、かくれ蓑、かくれ笠、打出の小槌、延命小袋」など、ここでは重宝な宝物の意である。『宝物集』に「抑人の為には、何か第一の宝にては侍る、(中略)人の身には隠蓑と申す物こそよき宝にては侍りぬべけれ。食物・着物ほしくは、心に任せて取りてんず。人のかくしていはん事をも聞きてんず。又ゆかしからん人のかくれんをも見てんず。されば、かばかりの宝はあるべき」云々。**III**。

だがこれらの言葉よりも大事なものは「蓑売」とか「蓑市」とかいう言葉である。今も田舎の市日に逢えば、蓑売が何枚かの品を列べて鬻ぐのを見かけることがある。昔は需要が多かつたからこのために市日が立つて盛んであつたようである。蓑市で最も有名なのは江戸の浅草であつた。『東名物鹿子』に、「弥生の中の八日、近郷より蓑を持ち寄りて浅草

寺の門前に商ふ。是を浅草のみのいちといふ。糞市や桜曇りの染め手本」。だがこの糞市は『東都歳時記』などには春三月十九日、冬十二月十九日と記す。いずれも浅草雷門前で市が立った。隔年に祭礼が行われない年は、十八日に変わったという。

乙「次の文章は、甲に引用される『列子』力命篇の一節による。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

齊景公游於牛山、北臨其國城而流涕曰、美哉國乎。鬱鬱芊芊、若何滴滴、去此國而死乎。使古無死者、寡人將去斯而之何。

史孔、梁丘、擗、皆從而泣曰、臣頼君之賜、疏食惡肉、可而食、驚馬稜車、可而乘也、且猶不欲死。而況吾君乎。晏子獨笑於旁。公雪涕而顧晏子曰、寡人今日之遊悲。孔與擗、皆從寡人而泣。子之獨笑、何也。

晏子對曰、使賢者常守之、則太公桓公將常守之矣。使有勇者而常守之、則莊公靈公將常守之矣。數君者將守之、吾君方將被蓑笠而立乎、吠畝之中、唯事之恤。何假念死乎。則吾君又安得此位而立焉。以其次送処之、迭去之、至於君也。而獨為之流涕、是不仁也。見不仁之君、見諛諛之臣、臣見此二者、臣之所為獨竊笑也。

注 牛山……齊の都の臨淄近くの山。鬱鬱芊芊……草木が緑に茂り盛んなさま。

滴滴……流浪すること。疏食惡肉……粗末な食事。驚馬稜車……劣つた馬と粗末な車。

丙「次の文章は、甲に引用される『宝物集』の一節による。」

抑人の為には、何か第一の宝にては侍る、と云ふ者あんなれば、まことに、何か宝にてあらん、とおもふ程に、そばよりさし出でて、人の身には隠糞と申す物こそよき宝にては侍りぬべけれ。食物・着物ほしくは、心に任せて取りてんず。人のかくしていはん事をも聞きてんず。又ゆかしからん人のかくれんをも見てんず。されば、かばかりの宝やはあるべき、と云ふめれば、そばなるものの声にて、暗がりより申すやう、物をねがはんには、いかでか人の物をとらんとは申すべき。申さば盗人にこそ侍るなれ。龍樹菩薩の隱形の法すら顕れにければ、外法をば捨てて、菩提の行に趣きて、馬鳴の弟子に成り給ひにき。されば、打出の小槌と申す物こそ、よき宝にては侍りぬれ。ひろからん野にまかりて、居もとらで、よく侍るべし、といへば、又そばなるものさし出でて、打出の小槌はめでたき宝にては侍りぬべけれども、口惜しき事の一侍るなり。万の物ども打出して、たのしく居たる程に、鐘の声を聞きつれば、打出したる物、こそこそと矢することの侍るなり。めでたくてゐたる程に、広き野の中に只独、はだかにて居たらんこそ、あやなく侍りぬべけれ。貧窮よりは衰苦はたへがたし。天人の五衰は地獄の苦にはまさるらん、と申しためれば、無益にぞ侍る。昔より隠糞・打出の小槌持ちたると云ふ人聞え侍らず。

注 龍樹・馬鳴……ともにインドの僧の名。天人の五衰……天人の死の際にあらわれる五つのきざし。

問十三 甲の文章における空欄 I にあてはまらない成語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 柳に燕
- ロ 魂に靈
- ハ 竹に虎
- ニ 梅に鶯
- ホ 紅葉に鹿
- ヘ 唐獅子に牡丹

問十四 甲の文章における傍線部1「蓑笠を着て人の家に入らぬもの」は、第四段落の『日本書紀』の故事を踏まえているが、空欄Ⅱにあてはまる意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 物事を断られる
- ハ 人に尊敬される
- ホ 青草を蓑にしない
- ロ 雨風を防げない
- ニ 神の祟りを受ける
- ヘ 盗賊に間違えられる

問十五 甲の文章における傍線部2「むくめき参らん」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ひっそり進むでしょう
- ハ 向かって参りましょう
- ホ うごめいて参りましょう
- ロ かぶって参りましょう
- ニ 頭角をあらわすでしょう
- ヘ 気持ちがあたかぶるでしょう

問十六 甲の文章における空欄Ⅲに入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 蓑に隠れたいしい人に近づきたいものだ
- ロ 蓑に隠れ食べ物を取れるはずもなからう
- ハ 蓑もとんでもない出世をしたものである
- ニ 隠蓑を持つと鬼につけねらわれたのである
- ホ 隠蓑などあるはずもなく馬鹿げた話である
- ヘ 隠蓑は打出の小槌とともに鬼の宝であった

問十七 甲の文章における波線部a、dの作品を、時代の古い順にならべた場合、正しいものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ a c b d ロ b c d a ハ c a d b
- ニ c d b a ホ d a c b ヘ d b a c

問十八 乙の文章における傍線部3「吾君方将被蓑笠而立乎吠畝之中、唯事之恤」の訓読として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 吾が君方の将は吠畝の中に立ちて蓑笠を被て、唯だ事の恤ひをみる
- ロ 吾が君は吠畝の中に蓑笠を被りて立つ方将を、唯だ事の恤れみとす
- ハ 吾が君方は将た蓑笠を被て而立して吠畝の中にあるは、唯事の恤ひなり
- ニ 吾が君は方に将に蓑笠を被りて吠畝の中に立ち、唯だ事を之れ恤へんとす
- ホ 吾が君の方将は蓑笠を被て吠畝の中に立たんをや、唯だ事を恤れまんとせん
- ヘ 吾が君は方に将に蓑笠して立ち吠畝の中に被るに、唯だ之の事を恤へんとす

問十九 乙の文章における傍線部4「見三不仁之君、見諂諛之臣」とはどのようなことを踏まえた言葉か、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 景公が、牛山から都城を見渡し、この国を離れては死にたくないと述べたが、史孔・梁丘扈が道にはずれていると反対したため、晏子は仲裁に乗り出している。
- ロ 景公が、牛山から都城を見渡し、この国を離れては死にたくないと述べ、史孔・梁丘扈がそれに追従したことは、ともに人の道にはずれていると、晏子が論難している。
- ハ 牛山における、景公と史孔・梁丘扈の感動的なやり取りを、晏子が傍らで笑ったため、景公は人の道にはずれていると強く非難し、晏子に死罪を命じている。
- ニ 晏子は、太公望・桓公のような賢者や、莊公・靈公のような武勇の君主が、斉をいつまでも支配し続けるなら、景公や臣下の史孔・梁丘扈には存在理由がないとしている。
- ホ 景公が、蓑や笠をつけて田畑に立ち、ただ農事のことへのみ心を砕いていたならば、国に平和が訪れ人々も豊かになつたであろうにと、晏子は嘆いている。
- ヘ 史孔・梁丘扈が、粗末な食事や痛んだ肉を食べ、足の遅い馬やみすばらしい車に乗ったとしても、景公にどこまでも従うと表明したことに、晏子は感動している。

問二十 丙の文章における空欄 a・b には共通する語が入る。その語を1〜6の中から一つ選び、助動詞を加えて活用させ、本文に適合するように記述解答用紙の所定の欄に記せ。

- 1 とし 2 よし 3 あし 4 なし 5 なめし 6 うれし

問二十一 丙の文章における傍線部5「あやなく侍りぬべけれ」は、なぜそのように述べるのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 龍樹菩薩の隠形の法によって得た打出の小槌の靈力により、従者にかしずかれて暮らしていたが、突然鐘の音が鳴ると消失したため、呆然としてしまったから。

ロ 美しい妻や従者にかしずかれた生活であったが、打出の小槌を盗まれて突然貧乏になったため、これからどうしてよいかとまどうことが可哀想に思われたから。

ハ 隠蓑と打出の小槌を比較すると、望んだ食べ物や着物が得られる点で共通しているが、隠蓑では盗みを働かなければならない点で、倫理的に劣っていると感じられたから。

ニ 打出の小槌の優れた点は、望んだようなものでも打ち出せることであるが、いったんその生活に慣れてしまつと、野原で裸同然に暮らしていた生活には戻れないから。

ホ 人のための第一の宝として有名な隠蓑と打出の小槌を得て、思い通りの生活をしてきたが、それがすべて盗品だったと知られ、恥ずかしい思いをしたから。

ヘ 打出の小槌から出した家屋や財宝に囲まれて楽しく過ごしていたが、鐘の音とともにすべて消え去り、野原にひとり裸で取り残された心情が思い測られたから。

問二十二 甲・乙・丙のいずれかの文章の趣旨と合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 蓑の語源は、身に担うという意味で、身近な道具だっただけにさまざまに表記・発音があることに留意すべきであるが、その中で最も重視しなければならないのは、蓑売りの市場における祭礼である。

ロ 蓑は、『三才図会』によれば雨の時に着用する衣で、漁師や農民が雨をふせぐために用いるとされ、その起原は中国古代にさかのぼり、日本古代においてもさかんに用いられた。

ハ 蓑と笠は、表裏一体で互いに支え合うたとえとして機能したが、時には勝手にものごとを動かし、あるいは身寄りがなくさびしいなどの、否定的な言葉としても用いられた。

ニ 蓑の語は、さまざまな生き物や植物と結びつき、例えば「蓑亀」は長寿がめでたいたとえに用いられたり、「蓑毛」は鷲の頸の毛のように合戦が入り乱れるたとえに用いられたりした。

ホ 晏子は、賢者に斉の国を守らせたなら、いつまでも保ち続けられたはずだし、勇者に国を守らせても、ずっと保ち続けられたはずだと、景公をいさめた。

ヘ 龍樹菩薩は、隠蓑と同じような身を隠す特別な法を使つて身を隠したが、打出の小槌の技の方が実用的だと考え、馬鳴の弟子となり何年も修行してその技を習得した。

(以下 余白)

